

自分史

中野 新之祐

はじめに

2018年9月8日、新宿で転倒し、左足の脛の二本の骨を脱臼骨折、手術のため16日間の入院、その後リハビリのため転院し、1ヶ月の入院を余儀なくされた。そのため、記念号の論文締め切りの10月末まで、入院生活が続くことになり、論文をどうするか、苦慮した。資料を参照しなくても書けるものという選択肢から、小生の71年の生涯を振り返り、その時、その時をどう生き、何を感じ、どう進路選択を行い、今の自分を形成してきたか、そこから、どういう教訓が引き出されるか、今後の小生の人生の指針になるものはないか、そういう問題意識をもって論述していくことにする。

七十一年の生きざま

誕生

1947年10月6日に生まれた¹⁾。「団塊の世代」である。生誕地は、京都市上京区今出川通り七本松西入ル東今小路町である。北野天満宮の東側、西陣織の旦那衆の花街であった上七軒の裏である。家族構成は、両親²⁾、兄（1944年生まれ）、姉（1945年生まれ）、祖父³⁾であった⁴⁾。家業は、西陣織の織り元である。当時、中野家は、二代目新次郎が戸主で⁵⁾、商売上手であった祖父が、戦時中軍に取り入り、国民服の受注に成功し、中野家の歴史のなかで最盛期を迎えていた。まだ、珍しかった自家用車、ダットサンを運転手付きで持っていた。その頃、小生が生まれたのである。したがって、名前は三つの候補から代々の「新」の一字を受け継いで、新之祐と命名されたのである。兄が嘉雄であるから、不思議といえば不思議である。

幼稚園

1951年4月、京都市立翔鸞幼稚園に入園、3歳であった。当時、翔鸞幼稚園には3年保育という制度はなかった。なぜ、3歳で入園したのか。その年、2歳上の姉が1年保育で入園したのである。その姉にくっついて、毎日小生は幼稚園に登園した。そして、姉の机の横で座っているので、幼稚園側も無視することはできず、小生に対して姉と同様に保育することになった。ゴリ押し入園である。それ以降、70歳で大学教員を定年退職するまで67年間にわたって、学校教育施設と関わった人生を歩むことになったのである。

自分史

幼稚園時代の鮮烈な思い出として、今でも覚えていることがある。兄が、小学校四年生の時、小生が幼稚園の年長の時のできごとで、兄が秋の遠足から帰ってきて、風呂桶（木の風呂桶で、ゴミや薪で燃やして、熱くする）の縁に両足を乗せて風呂に船を浮かべて遊んでいたところ、足を滑らせて、湯船に足から腰まで浸かってしまった。風呂の湯は、それまでに「女中さん」（その頃、「女中さん」と「番頭さん」を一人ずつ雇っていた）が沸かして、相当熱かったので、下半身に大火傷を負ったのである。その時、母親と小生は、母親の実家（やはり西陣織の織り元で歩いて15分ほどの距離にあった）に行っていて、その帰り、家まで5分ほどのところで、番頭さんが自転車で急いでいるのに出会って、母親が「何ごと」と尋ね「救急車を呼びに行く」という返事を聞いて、ことの重大性を知った。家に近づくとも父親が兄を毛布でくるんで出てくるところであった。そして、タクシーで両親と兄が近くの相馬外科病院に行った。その時の晩ご飯は、松茸ご飯だった。松茸は、今では高値の花で、なかなか食せないが、当時は安くて結構手頃な食材であった。兄は、今でも松茸ご飯は、食べない。下半身を中心に生命も危ない50度の大火傷であった。

明けて54年に退院してわが家に戻ってきた兄は、ほとんど歩けなかったので、座敷で布団を敷いて、リハビリに励むことになった。その頃、天理教の人が来て、「悪しき払え、助け賜え天理教の尊」と寝ている兄の前で、身振り手振りで念じて帰って行った。わが家には、仏壇、お稲荷さん、神棚、おくどさんなど、さまざまな神仏が祀られていた。それらを総動員して兄を助けてもらおうと、両親は念じたのだろう。

1954年3月、3年間保育を受けて、卒園することになった⁶⁾。卒園式では、3年保育の代表として（一人しかいない）答辞を読んだ。その前の晩、祖母と母親の前で、答辞の練習をさせられて泣いたことも良き思い出だ。

小学校

クラス55人のすし詰め学級である。い組からち組まであり、小生は1年い組であった。ランドセルにビニール袋に給食用のアルミの食器を「ガチャガチャ」いわせて、登校した。ビニール袋の匂いは小学校の匂いだった。2年生の頃、授業中にノートを丸めてメガホン状にして、望遠鏡のように辺りを見回していて、担任の先生から「何が見える？」と聞かれて、赤面した記憶がある。担任は2学年持ち上がりであったが、3年、4年の時は、女の先生で、3年と4年では、別の先生が担任であった。このころから、今でも記憶に残る思い出が増え始める。成績も上向きで、4年生から、学級のクラスメートの選挙で「児童委員」（学期ごとに男子1名、女子1名が選出される）に選ばれるようになった。

このころから、父親の「荒れ」が始まる。先述したように、父親は耳が遠い。西陣織の織り元には、帯を仕上げるのに、デザイナー、紋紙の制作者、糸繰りの製糸業者、織機の修理業者、そして織り手など分業して帯の制作に携わる人々を束ねるプロデュース力が必要とさ

れるのであるが、耳が遠いために、コミュニケーション力が不足し、日常的に「イライラ」感、ストレスが溜まるのである。晩ご飯は、晩酌する父親のおかずは、他の家族のおかずとは別で、父親は、冬なら火鉢にヤカンをかけて、その縁にチロリという酒を燗する道具をかけて、日本酒を入れて燗をし、チロリから直接お猪口に酒を入れて飲むのである。酒が進むにしたがって、酔いがまわり、やがて日中に感じた不満が爆発し、母親と口喧嘩が始まり、とどのつまりお膳（卓袱台であった）をひっくり返すことになる。母親が「里に帰らせてもらいます」と言って、家を飛び出すのは、2度や3度のことではなかった。そのような父親を見て、「将来、大人になったら酒は絶対飲まない」と思ったものだが、小生は結局酒飲みになっている。

5年、6年の担任は、1、2年の時の担任と同じ男性の担任であった。5年の1学期、6年の1学期と圧倒的票差で「児童委員」に選出され、リーダーシップがとれるようになった。6～7人の仲良しグループもできて、「できない子」や「貧しい子」、「目立たない子」への目配りもできる、いわゆる「鼻持ちならない」「優等生」であった。放課後は、自宅の敷地が広く、敷地内に工場やアパート、借家などがあって、それに遊ぶスペースもあったので、そこで「ガキ大将」として、近隣の子どもたちを束ねて遊んでいた。また、学校の同級生とお互いの家で遊んだり、北野天満宮の空き地で三角ベースなどをして遊んだ。

中学への進路選択であるが、小生の親族、父方の親族はほとんどいなくて、母親の親族（山下家）の叔父、叔母、それに小生の兄も同志社に進学していた。中学校への進路について、小学生時代に深く考えたことはなくて、漠然と小生も同志社に進学するものと思い込んでいた。それが、6年生の12月になって、母親と6年の担任との話し合いで、「私の息子なら、洛星に入れる」という担任の言が決めてとなって、急遽、私立の洛星中学校を受験することになった。洛星は、自転車でわが家から5分ほどの距離にあり、その存在を小生はそれまで全く知らなかった。公立に進学する場合は、衣笠中学校であったが、洛星は、その衣笠中学校よりも近かったのである。

1960年2月、小生は、京都学芸大学（現在の京都教育大学）付属中学校と洛星中学校を受験することになった。附属中学校は不合格、同級生と2人で受験した洛星中学校は、同級生は不合格であったが、小生は合格した。小学校6年ち組の同級生の内、私立に進学したのは、男子では小生のみ、女子で2名であった⁷⁾。洛星中学校に進学したのは、小生の意思では全くなくて、親（母親）の意思にしたがったのである。

中学校・高等学校

洛星中学校は、カナダのイエズス会のヴィアートル会が運営する中高一貫の学校で、戦後創設され、小生が第9期生であった。この頃から、京大への進学率を上昇させ、進学校としてその名を知られるようになり始めていた⁸⁾。総じて、戦前に創設されたプロテスタント系

自分史

の私立の中・高等学校が、キリスト教の精神に基づいた教養教育中心の教育実践を行っていたのに対して、戦後相次いで創設されたカトリック系の私立の中・高等学校（例えば、栄光学園、鹿児島ラサール、函館ラサール、星光学園など）は、進学率の高さを追求する教育実践を展開した。優秀な人材を集め、そのうちの何人かをカトリック信者に改宗させ、カトリックの普及を図ろうとしたのである。

洛星中学校は、45人学級の3クラス編成の小規模の中学校であった。他方、翔鸞小学校のほとんどの同級生は、公立衣笠中学校に進学した。翔鸞小学校、衣笠小学校、柏野小学校の三つの小学校から、衣笠中学校に進学したため、18学級の大規模中学校になった。教育環境に雲泥の差があったのである。洛星には、自転車で通学したのだが、翔鸞小学校の同窓と一緒に洛星を受験し不合格になった友だちの家の前を通って行かねばならず、もし鉢合わせすれば気まずいという思いで、わざわざ反対側に渡って通うという気弱さであった⁹⁾。1年生の時は、学年トップ10以内で、成績は良かったのだが、その後、学年が上がるにしたがって、成績は下降線を辿り、20位から30位辺りをウロウロするというレベルになった。洛星中・高6年間を通じて、ガリガリ勉強したという記憶はなく、体育祭を始め、文化祭、合唱祭、クリスマス会など、諸行事に積極的に参加し、日常的にもよく遊んだ。部活では、天文学部と卓球部に所属し、夏休みにペルセウス座流星群の観測のため、学校の屋上で徹夜観測したのは良き思い出である。

サッカーやバレー、ハンドボール、バスケット、相撲やレスリング、いろんなことをして、楽しい学校生活を送った。級友から「カッパ」をいう渾名も賜った。他方、生徒指導は厳しく、制服、制帽の着用が義務づけられ、私的に家族で繁華街に出かける時も制服制帽でなければならなかった。もちろん友だち同士で喫茶店に入ることも厳禁で、禁止事項に触れる行為が見つかった場合は、生徒指導室に呼ばれ、親の始末書を要求された。高校時代になると¹⁰⁾、日韓条約の締結やアメリカのベトナム戦争への介入など国際情勢が問題となり始め、公立高校の高校生が、洛星の校門近くで、反対集会の参加を呼びかけるビラを配ることが度々行われた。それに対して、学校側は、集会には参加してはならないというお達しを出した。ホームルームなどで、それらの問題について討論したりはしたが、集会に参加するということはなかった。

政治的・社会的問題も考えながら、ガリガリの受験勉強もせず、なんとなく京大や東大に進学していくというスタイルだったのである。しかし、実は、その裏で、不登校になり、あるいは精神を病んだり、成績不振で洛星を追われた級友が何名もいた。そのことに小生は気づかなかつた。もっといえば、洛星に限らず多くの同窓生を踏み台にして、そのことに気づかぬまま、無意識のうちに受験戦争に打ち勝って、学歴社会の頂点に上ろうとしていた小生がいたのである。そのことに気づいていくのは、後述するように東大の全共闘運動のなかであった。

大学の進路選択は、高校3年の最大の課題であるが、小生は、漠然と将来は経済コンサルティングになろうと考え、京大の経済に進む選択をしたが、「経済なら東大」という叔父の勧めもあって、文科Ⅱ類を受験することにしたのである。洛星高校の卒業式を終えて、サッカーに興ずるといふ余裕綽々で、東大文科Ⅱ類を受験するも、ものの見事に不合格となった。進路の選択肢はなく、駿台予備校を受験し、浪人生活を送ることにした。

予備校生活

1966年4月、駿台予備校午前部に入校した。総武線、下総中山駅から10分ほどの駿台予備校中山寮に入寮した。4人部屋で、各自、ベッド(二段ベッド)、机、本棚、洋服ダンスが各一つ配されていた。部屋の構成員は、岐阜出身の文科Ⅰ類志望者、栃木出身の文科Ⅱ類志望者、欠員1名であった。洛星から、理科Ⅲ類志望者が1名入寮したが、別の部屋であった。予備校1学期のルーティンは、お茶の水の校舎で、平日は9時から、15時頃まで、諸教科の講義を受け、土曜は模擬試験を受けるというものであった。東京に出てきて感じたことは、「臭い」ということと、山が全く見えず、東西南北がはっきりしている京都に対して、東京では東に向かって歩いているといふの間にか南に向かっていくというように方向音痴になったことだ。また、18歳までの京都の生活では、電車やバスでの通学の経験はなかったのだが、下総中山から総武線でお茶の水に定期券で電車通学するという初体験をした。最初の頃は、新鮮な体験であったが、やがて、超満員の通学に嫌気が指すようになった。そのことが、2学期以降、予備校にほとんど通わなくなった一因となった。それでも1学期の成績は、それなりに良く、Aクラスの90位程度であった¹⁾。夏休みに部屋の仲間、洛星の同窓生の部屋の仲間と伊豆大島に観光旅行に出かけ、その後、京都に帰郷した。9月になって、下総中山に戻ってきたが、以後、平日の講義には全く出席しなくなった。終日寮で生活し、土曜日の模擬試験を受験するという生活スタイルになった。そのころ、部屋でトランプのナポレオンが流行り、徹夜でナポレオンをして、朝に就寝し、昼まで寝るといふように、生活が荒れ出した。受験勉強も遅々として進まないという状態に陥ったのである。そのころから、本をよく読むようになった。無意識のうちに、受験勉強をしない言い訳に、本を読むことに逃げ込んでいたのかもしれない。読んだ本のうちで、特に感銘を受けた本は、倉田百三の『出家とその弟子』であった。そこから、『歎異抄』、下村湖人の『次郎物語』などを読み、親鸞の思想に傾倒していくことになった。「自分の内部には、救いようのない悪が存在している」「偽善ではなく、自己を愛する以上に他者を愛することができるか」「総武線で、千葉の農家のおばあさんが野菜などの作物をたくさん背負って、東京に行商に出かけるのを見かけるが、そのおばあさんの荷を代わりに背負って、おばあさんの手伝いをするることができるか」。そんな突拍子もないことを真剣に考えたのである。経済への関心は、全くなくなっていた。

自分史

そのころ、他の部屋から福島出身の文科Ⅰ類志望の浪人生が移ってきた。成績は非常に優秀で、常にトップ10に入っていた。彼は、前の部屋で人間関係が悪くなり、欠員が1名であった小生たちの部屋に移ることになったのである。人間関係が悪くなったのは、もっぱら、彼の性格に由来することであった。部屋の連中が自分の机の電灯を点けて勉強していると彼は寝られない。部屋の連中が寝静まって、漸く彼も寝られるのである。それで、精神的ストレスが溜まり、やむなく部屋を移ることになり、小生たちの部屋に来ることになったのであった。小生と部屋の仲間2人は、彼を歓迎したわけではなかった。彼の性格では、協調して集団生活を営むのは無理であるというのが、小生たちの判断であり、「寮を出て、一人で下宿するのが彼にとってベターである」というのが、3人の結論であった。そこで、一計を企んだ。毎夜、3人が交代交代に夜更けまで、机の電気を点けて、起きているのである。そうすれば、やがて彼は音を上げるだろうと考えたのである。それを10日ほど続けて、彼との話し合いを持った。彼は、小生たちの説得を受け入れて、下宿することとなった。彼の引越越しの手伝いをして、事態は円満に解決した。しかし、これには後日談がある。正月に福島に帰省していた彼は、兄の運転する車がパンクして、それを修繕しているときに、トラックに轢かれて即死したのである。そのニュースを聞いて、「もし、彼を追い出さずにいたなら、その後の彼の人生は変わっていただろうし、彼は死ななくても良かったのではないだろうか」という思いに囚われた。その思いは、「人との出会いは、それが見知らぬ人同士の出会いであったとしても、出会った人同士のその後の人生に大きな影響を及ぼすこともあるのだ」という感慨を小生にもたらした。人はさまざまな人との関わりのなかで、その生を選択し、生きているのだと思うようになった。

1967年2月に、早稲田の政経学部と慶応の経済学部を滑り止めに受験した。そして、3月、東大の文科Ⅱ類の受験に臨んだ¹²⁾。東大の合格発表がある前に早稲田と慶応の発表があり、早稲田は不合格、慶応が合格で、さすがに不安で、慶応に入学金を納めてもらった。東大の発表当日は、自分はとても見に行く勇気はなく、京都にいて、東京の西陣織の間屋に修行に出ている兄に発表を見に行ってもらった。合格であった。

駒場時代

1967年4月、東大文科Ⅱ類に入学した。理科Ⅲ類に合格した洛星の同窓生と代々木上原の民家の12畳ほどの洋間を借りて、共同生活を始めた。クラブは、「青少年友の会」と馬術部に入部した。「青少年友の会」というのは、一橋大学や東京女子大学、日本女子大学、津田塾大学などとの連合クラブで、家庭裁判所で「保護観察処分」となった少年の家庭教師を行い、その立ち直りを援助するというを目的としたクラブであった。馬術部は、三鷹に厩舎があり、泊まり込みで馬の世話をし、5月の連休には、山中湖の東大の寮で合宿を行った。山中湖で馬に乗れるものと思っていたが、実際は毎日山名湖一周マラソンを走らされ、

結局馬には乗れずじまいであった。三鷹厩舎での馬の世話は大変で、餌の草刈り、馬を洗う（洗っていると蹄の付いた馬の足に踏まれる、それが非常に痛い）、裸馬に乗る訓練で、馬から振り落とされ、鐙なしで馬に乗るので馬から落ちないように足の内股で体を支えるために内股がずるむけになる、などなどで、5月いっぱい、早々に退部してしまった。授業にはほとんど出ず、パチンコに麻雀、ボーリングに明け暮れ、「青少年友の会」の活動に没頭する日々を送ることになる。

「青少年友の会」の活動で、盗みを働いた中学3年の少年の家庭教師役を始めることになった。彼は、中学では番長を張っていたが、先輩とのつながりで窃盗団に加わり、学校の音楽室に忍び込み楽器類を盗んだ犯罪で捕まった。彼は見張り役であった。家庭裁判所で保護観察処分となり、小生が週2回1時間半の家庭教師役を務めることになった。勉強を見るとともに、生活上の相談にのるというのがその役割である。両親は離婚、母親は結核で病院に入院していて、祖母と兄（高2）の三人暮らしであった。兄は、しっかりしていて、学校で学ぶ知識は生きていくための力と何の関係もない、単位を取得して高校を卒業できればそれで良いのであって、カンニングをしてでも、単位を取得したいという考えを持っていた。カンニングペーパー作りを小生に依頼したが、断った。彼と彼の友だちと何回か、雀卓を囲んだが、彼らが煙草を吸うので、話を合わせるために小生も煙草を吸い始めた。それが以後50年に亘る喫煙生活の始まりであった¹³⁾。

「青少年友の会」のサークル内で、「非行少年」をどう理解するかをめぐって、二つの意見の対立があった。一つは、「非行」は反社会的なものであり、既成の権威に反抗するエネルギーに溢れたものであり、そのエネルギーは尊重すべきで、決して矯正する必要のないものである、という意見である。他方は、「非行」を犯す少年には、そのようなエネルギーはない、社会に適應させて彼らに生きる力を与える必要があると意見である。その意見の対立は、やがて前者の意見が優位を占めるようになり、サークルの活動は、家庭教師を行わないという方向に進むことになった。そして、東大闘争に流れ込んで行くのである。

1968年7月、医学部学生の不当処分に端を発した東大闘争は、教養課程の駒場でもバリケード封鎖が行われ、授業は全面的にストップした。東大全学共闘会議が結成され、全学的にバリケード封鎖され、研究、教育活動はストップした。日大全学共闘会議と並んで、68年から70年にかけて、全国的に展開を見る大学闘争の先頭に立つことになった。そこで問われたキー概念は、「自己否定」と「大学解体」であった。無意識であったとしても、それまで他者を踏み台にして、受験競争を勝ち抜き将来の安定した地位を確保しようとしている自分の現在の「あり方」を否定し、本物の自分を作り直そうというのが、「自己否定」の論理であった。既成の秩序のなかで、日本のリーダー養成機関としての東大の役割の否定、中堅技術者養成機関としての日大の役割の否定、そのような大学のそれまでの学問・研究・教育活動のあり方を否定して、作り直そうというのが、「大学解体」の論理であった。

自分史

全共闘運動のなかで提起された「自己否定」の論理は、小生が漠然と感じていたことを明確にするものであった。中高一貫の洛星での生活のなかで、ガリガリと受験勉強をしたわけではなく、和気藹々とした友人関係を作り、結構遊んで楽しんで、成長してきた自分、そういう自分は、無意識のうちに他者を踏みつけ、洛星という箱庭のなかで守られ、矛盾を矛盾として感じぬままに、既成の秩序のなかで優位な地位を確保しようとしている、そういう今の「自分」のあり方、将来のあり方を否定しなければならないと痛切に感じたのである。「青少年友の会」のメンバーもほとんどが全共闘に参加していった。11月23日、駒場祭で「青少年友の会」は、展示物を出展した。その前日の22日には、本郷の安田講堂前で「東大、日大闘争勝利全国学生総決起集会」のデモに参加し、夜は麻雀で徹夜、72時間無睡眠という記録を作った。もう、そのころには、経済学部への進学は、考慮の外になった。

1969年1月安田講堂攻防戦があり、69年の東大入試が中止になり、東大全共闘運動は次第に収束に向かうことになった。69年の4月から授業が再開されたが、実質的には授業はほとんど行われず、クラス討議が重ねられた。まもなく2年の前期の試験が実施されたが、ほとんどがレポートの提出であった。そして夏休み明けの9月に、進学先の志望調査が行われた。当時の小生の最大の関心事は、それまでの「自己を否定」した上で、新たな自己をどう作り出し発見していくかにあった。その意味で「自己教育」が課題となった。その課題を追求していくのに最適の学部として、教育学部を選択したのである。

教育学部時代

1970年6月、教育学部教育学科教育史・教育哲学コースに進学した。同級生は8名、文科Ⅰ類、Ⅱ類から各1名、Ⅲ類から2名、理科Ⅰ類から1名、理科Ⅱ類から2名、理科Ⅲ類から1名と全ての類から進学者がいるというユニークさであった。教育学部は、当時全共闘に敵対していた日本共産党の大衆青年組織である民主青年同盟の牙城とみなされていて、小生もそういう色眼鏡で同級生を見ていた。授業にはほとんど出席せず、必要な単位だけは取得していった。また、教員免許状の取得に必要な単位も取得した。「新たな自己を作り出し発見していく」という課題を果たせぬままに、徒に時は流れていった。

71年7月、4年になった。そのころは、高度経済成長の終わりで好景気で、企業の新卒採用意欲は旺盛で「早苗狩り」と呼ばれ、専門の勉強を始めたばかりの学生が、企業の内定を得るという状態であった。小生の予備校時代の友だちや「青少年友の会」のサークル仲間も、大手企業に内定していった。小生は、企業に就職する気も、官僚になる気も、さらさらなく中学か高校の社会科の教員になるかと漠然と考えていた。といっても教員採用試験に向けての勉強も一切しなかった。

72年6月、学部を卒業し、7月には、川崎の田島中学校¹⁴⁾で2週間の教育実習を行った。そして、卒業した後の進路として、大学院に進学する道を選択した。「モラトリアム」を延

長して、「自己を発見する」という課題を追求していくことにした。8名の同窓生のうち、小学校、中学校、高校の教師に進んだのが1名ずつ、企業に就職したのが1名（後に高校の教師に転職）、大学院に4名が進学した。

大学院時代

72年9月、東京大学大学院教育学研究科教育史・教育哲学課程に進学した。それを契機に、それまで距離を置いていた授業に積極的に出席するようになった。習俗研究に傾斜を深めていった大田堯ゼミの影響を強く受けた。民間教育史料研究会という研究組織にも所属し、長野県飯山市富倉地区¹⁵⁾や岐阜県中津川市阿木地区¹⁶⁾で合宿し、その地区の子育てにまつわる習俗調査を行った。一方、日本教職員組合の研究組織である国民教育研究所の研究者として、歴史部会に所属し、日本各地の教育遺産をめぐる旅行に参加した。そうしたなかで、小生の問題関心は、「日本のごく普通の親は、どういう思いを持って子どもを育てていたのか、子どもを育てることによって、何を期待したのか」といったことを歴史的に跡づけてみようという方向に収斂し始めた。研究室の仲間（先輩、同僚、後輩）との人間関係も深まり、夏や冬に「史哲」（教育史・教育哲学課程の呼称を略して研究室を史哲研究室と呼んでいた）で研究合宿なども行った。

修士論文は、2年間では書くことができず、3年かけて執筆した。幕末期の荒廃した農村の復興に尽力し、独自の思想、教育論、教育構想を生み出した宮負定雄、大原幽学、鈴木雅之、三浦命助の4名を取り上げ、その歴史的意義を論じたものである¹⁷⁾。

75年4月、博士課程に進学し、修士課程で抱くようになった問題関心をより深めていった。国民教育研究所で「地域に根ざす教育運動」の問題を継続的に追究し、初めての論文を公表した¹⁸⁾。また、日本民俗学と歴史学の統合の問題を考察した論文も執筆した¹⁹⁾。しかし、そもそも大学院にモラトリアムとして進学した動機である「自己を発見する」という課題は、諸活動をするなかで、しだいに有耶無耶になりつつあった。77年11月、前年から遠距離で付き合っていた当時神戸薬科大学の助手を勤めていた伴侶と結婚し、叔父夫婦（母親の弟）が住んでいた茅ヶ崎に新居を設け、新生活を始めた。78年3月で奨学金も切れ、生活費は、塾の講師と家庭教師、それに4月から神奈川県立松陽高校の日本史の非常勤教師に採用され、その給料、そして伴侶が水質分析のバイト料を稼ぎ、それらで賅っていた。将来の見えない不安定な生活であったが、不思議に将来への不安は、全く感じなかった。10月には、第一子の長女が誕生した。80年2月に第二子が誕生したが、ダウン症の女の子であった。80年3月、博士課程を満期退学となる。

オーバードクター時代

80年2月6日深夜、伴侶が出産の際の睡眠薬から目覚めぬうちに、自宅近くの女医と看

自分史

護師1名の小さな産婦人科で生まれた二女と、小生は対面し、その顔の表情から「もしかしたら、ダウン症ではないか」という疑いを持つようになった。その疑問を女医に問いただしたところ、女医も疑っているとのことで、生まれたとき産声を上げず仮死状態であったことを告げられた。自宅に戻ってダウン症について調べたところ、確定診断は遺伝子検査によること、ダウン症の場合、心臓に欠陥がある場合が多いこと、感染症に弱いことなどがわかった。心臓の欠陥の有無が心配だったので、翌日女医に茅ヶ崎市立病院小児科に紹介状を書いてもらった。母乳の飲み、人工乳の飲みのいずれも弱く、体重は減少していった。伴侶にはダウン症の疑いの件は、隠していた。ショックで母乳が止まることを懼れたのである。細心の注意を払いながらもんびり、ゆっくり育てようという気持ちを込めて、「暢子^{のぶこ}」と名づけた。「のんちゃん」と呼ぼうと考えたのである。生後、10日目に、茅ヶ崎市立病院小児科を受診した。心臓の血陥の有無と飲みの悪さを相談するためであった。すぐに受診できると考えていたが、小児科の待合室で、体温を測るなど1時間近く待たされてしまった。感染症に弱いという思いがあったので、患者が一杯いる待合室で待たされることに耐えられず、大声で早く診てもらいたい旨、看護師に訴えた。それを聞いた医師が、すぐに診察に招き入れてくれた。しかし、医師は心臓の心音を聞き、暢子の顔の表情を診て、「多分、ダウン症だろう。心臓は今のところ大丈夫であるが、こういう子は、20歳くらいまでしか生きられない²⁰⁾。脱水症状が心配だから入院の必要がある」という診断であった。下線部のようなことを平気という医師の元には預けられないと思って、心臓に欠陥がないとのことであったから、そのまま「私たちで育てる」と言って、病院を辞した。皮肉にも5歳の時に肺炎になり、その医師の元で、入院生活を送ることになった。

毎日、何CC飲んだかを記録しながら、脱水症状に陥らないよう、体重を計り、生後1ヶ月を経たところに伴侶にダウン症の疑いがあることを告げた。伴侶は、二女出産前、神奈川県立子ども医療センターに勤め血液分析をしていた。その関係で、医療センターの所長と知己で、生後三ヶ月後の5月にセンターの遺伝科で染色体検査を行い、ダウン症であることが確定した。

このようなバタバタとした生活を送っている最中に、小生を東大教育学部教育学科の助手に採用するという話が持ち上がった。正規の職のないオーバードクターの人が多数いるなかで、小生が安定した収入が保障され、研究活動もできる職に就くということに対して逡巡もしたが、ありがたい話なので受けることにした。

助手時代

80年5月、東大教育学部教育学科教育史・教育哲学コースの助手に就職した。以後、38年間に亘る大学教員生活の始まりであった。助手の役割は、研究室の教授、助教授の先生たちと、院生、学生の間立って、研究・教育活動がスムーズに展開できるように体制を整え、

配慮し、研究室の運営に必要な事務的なことを行うことであった。助手の位置づけは、学部によって異なっていて、教育学部の場合は、そのまま、講師、助教授、教授というように昇進していくのではなくて、必ず他大学に転出しなくてはならないという内規的約束事があった²¹⁾。しかし、他のオーバードクターの人たちが、不安定なバイト収入に頼って生活しているのに対して、安定した収入の得られる特権的な地位にいるということについて、内心忸怩たる思いがあった。以後、できるだけ早く、他の大学に職を得ることが、小生の課題となった。

82年4月、東京経済大学で、週1コマ「日本教育史」を講ずる非常勤講師として採用され、大学生に対して、初めて教鞭をとることになった。83年に入って、昭和女子大学で教育原理を担当する教員を募集しているという話があり、応募することにした。

昭和女子大学時代

83年4月、昭和女子大学短期大学部教育学科に教育原理、教育史、教育法規担当の講師として採用された。幼稚園と小学校の教員養成学科である。採用に際し、学長面接があった。誓約書の提出を求められ、その誓約の項目に「建学の精神に反するような団体には加盟しないこと」という項目があった。「建学の精神に反するような団体」とは例えばどういう団体かという小生の質問に対して、学長は、「例えば、日教組である」という返答であった。したがって、昭和女子大学には、教職員組合はなかった。

教育学科は、専任教員が10名ほど、学生数は1学年100名強の小規模な学科であった。昭和女子大学は、1920年に人見東明が創設し、その娘婿の人見楠郎が小生が赴任した際の、学長兼理事長であった。昭和女子大学は、1962年、警察による予防的検束を可能とする警防法案の反対署名活動を学内で行った2名の学生を「建学の精神」に反する活動を行ったとして、退学処分にした。処分を受けた学生が、「思想、信条の自由」を保障した憲法に反する処分であるとして、処分の無効を求める訴訟を提訴した。第一審は、学生側の勝訴、第二審で「建学の精神」を認めて入学したのであるから、それに反する行動をとった学生の処分は有効として、大学側の逆転勝訴、最高裁も第二審の判決を維持した。この昭和女子大学事件で、被告の大学側の人間として人見楠郎が活躍したのである。そのことを創立者の人見東明が評価し、その後継者となることを認めた。東明の死後、楠郎は、昭和女子大学における独裁的地位を確立していった。

教員は、授業があってもなくても週5日は、朝8時半から17時まで、大学への出校を義務づけられ、タイムレコーダーで管理されていた。クラス担任制が敷かれ、初等教育学科は1学年2クラスで、10名ほどの専任教員のうち毎年4名がクラス担任を担当した。朝のHR、帰りのHR、教室の清掃など、高校までの教育と変わらぬ教育活動が行われた。大井松田に東明学寮があり、房総に望秀学寮があって、毎年どちらかの学寮で、専任教員、学生全員参

自分史

加の4泊5日の合宿研修が行われた。教授会はなくて、その代わりに全学教員集会なるものがあった。学長の命令を上意下達的に拝聴する集会であった。そこでの反論は許されなかった。全共闘運動以来、小生のなかで培われてきた反権威主義的な性格から、しばしば学長と対立することがあった。学長から睨まれていたのである。

昭和に赴任して翌年ころから、大学院、助手時代に蓄積した研究を相次いで発表していった²²⁾。86年4月、助教授に昇任した。学科内の教員の関係は、日常的に接触する機会が多く、良好であった。学科での小生の役割は、東京経済大学に転出するまで、一貫して教務畑で、カリキュラム編成とその改革、時間割の編成、学科の将来像の構築などをもっぱら担当した。

84年3月、三女が誕生した。ダウン症の二女は、姉と同じ幼稚園に三歳児で入園、小学校、中学校と普通級に通わせた。地域のなかで育ててほしいと考えたからであった。小学校の中学年くらいまでは、何とか授業内容について行くことができたが、高学年になるとほとんどわからなくなった。教室を抜け出すこともしばしばになった。中学校で、特殊学級へ入れるということも考えたが、特殊学級のある中学校は遠く、地域の友だちからも離れることになり、何よりも「お姉ちゃんと同じジャージを着たい」という本人の希望を尊重して、地域の中学校に進学させた。中学校では、友だちとの関わりより、教師との関わりが深まり、黒板の板書された文字を写すことにより、読み書き能力は向上した。中学まで地域で育つことによって、暢子と地域の人たちとの関係が深まり、地域の人たちに暢子のことを普く知ってもらえたことが、よかった。高校進学にあたって、神奈川県立茅ヶ崎高校の定時制も考えたが、姉妹と生活時間が合わなくなることもあって、結局、平塚にあった湘南養護学校高等部に進学することになった。

初等教育学科、ひいては昭和女子大学を改革しようという思いは強くあったが、実際にはそのことは遅々として進まなかった。そのうちに95年になって、東京経済大学に転任しないかという話が持ち上がった。小生の研究の面で考えれば、願ってもない話であったが、共に改革を志して活動していた初等教育学科の教員や他学部他学科の教員の仲間を置いてきぼりにして、泥船から逃げ出すような気持ちになり、移ることを逡巡した。しかし、最も親しくしていた教員から、逡巡していた小生の背中を押され、移ることを決意した。

東京経済大学時代

96年4月、東京経済大学に教育原理、教育学担当の教員として、赴任した。教育原理は、昭和女子大学の13年間講じてきた講義であり、十分な蓄積があったが、総合教育科目の教育学は、どのような講義にするか悩んだ。「教育」を狭く「学校教育」に限定せずに、広く人が生まれて死ぬまでの一生涯のそれぞれの発達段階における発達課題、教育課題を講じていくという方法をとることにした。「教育」を「人間という動物の種の持続を行う営み」と

捉え、受精から始まって、胎児期、乳幼児期、少年期前期、少年期後期、青年期前期、青年期後期、脱青年期、成人期、老年期、死に時期区分し、それぞれの発達時期における発達課題、教育課題を、近代以前と近代以降でどう変化したのかに着目しながら、明らかにしていこうとした。時には、300名を超す受講者を前に、試行錯誤しながら講義内容を練り上げていった。

担当を義務づけられていたゼミについてもどのようなテーマのゼミにするかで悩んだ。赴任当初は、「教育」に関する本のうち、学生に身近な内容の問題を取り上げた本を読み合わせるという形式のゼミにしたが、今一つであったため、子どもの作文を題材にして、「教育」の問題を考え合うというゼミにした。しかし、そのゼミも期待したほどには成果が上がらなかった。そこで、2003年から、総合教育科目の教育学と連動する形で、「人の一生涯の教育課題」という観点から、狭く「学校教育」の問題に限定せず、人の一生涯を見通して、毎回テーマを設定し、そのテーマに是か非かを論じ合うディベート形式のゼミをスタートさせた。毎回のディベートの是と非の立論のレジюмеとディベートの記録を載せた一年間のゼミの記録集である『中野ゼミディベート記録集』をゼミ特別指導費で、年度末に刊行するようになった。このゼミの形式は、定年退職するまで続くことになった。

2003年のゼミ生に川崎将平君というラグビー部の部員がいた。彼から、東京経済大学のラグビー部の部長になってくれないかとの打診を受けた。それまでの部長であった土屋教授が定年退職になるので、その後釜にという要請であった。先述したように、小生の親戚には同志社大学の卒業生が多かった。小学校、中・高時代に正月の2日に、母親の実家に母方の親戚が集まり、同大が出場する大学ラグビーの準決勝をテレビ観戦するのが、恒例であった。当時、同大は強豪で何回も大学選手権で優勝していた。そういうこともあって、小生はラグビー経験はなかったが、ラグビーを観戦することが好きであった。川崎君の要請を受けて、2004年から東京経済大学ラグビー部部長になった。東京経済大学ラグビー部は、リーグ戦グループ²³⁾に属し、その5部であった。その後、2018年に定年退職するまで、一貫して5部であった。その間、4部との入れ替え戦に4回出場したが、いずれもロスタイムに逆転されたり、同点（同点の場合は4部のチームが残留）で4部昇格は果たせなかった。定年前の2017年度のシーズンが一番惜しくて、5部を全勝優勝、4部との入れ替え戦で、終了間際の相手の反則でPKを決め、31対29で「勝った」と思ったのだが、終了のホイッスルが吹かれる直前、今度はこちらの反則で相手にPKを決められ同点、そのまま終了した。4部昇格を逸したことはかえすがえすも残念であった。

昭和女子大学から東京経済大学に移って、その教員の置かれたあり方の違いに驚くことが多々あった²⁴⁾。学生との関わり方も大きく異なっていた。昭和では、教え教えられる関係、指導し、指導される関係であって、それ以上の関わりはなかった。一緒に酒を飲んだり、コンパをすることは厳禁であった。それに対して、東京経済大学では、ゼミでコンパを一年に

自分史

何回も行い、ゼミ合宿も行い、教え教えられる関係を超えて、人間同士として付き合える関係を持つことができた。同じことは部活でも言え、ラグビー部の部員（マネージャーも含めて）とは、部長と部員という関係を超えて、人間同士としての深い関係を持てた。これらは、小生にとって、貴重な財産になった。

暢子は、養護学校高等部を卒業し、障がい者作業所の通所施設「工房絵」に入所した。好きな絵を描いたり、詩作を行うのが作業の内容であった。そこの職員であった人が、平塚に「(株) COOCA」を立ち上げ、障がい者の作品を一般の作品として販売し、利益をあげて行こうとしたのである。2004年、暢子もそこに移籍し、以後2回、茅ヶ崎美術館で個展を開催し、「(株) COOCA」最古参のメンバーとして、現在に至っている。

長女は、大学を卒業し就職して、東京で一人暮らしを始め経済的にも精神的にも自立に向けて歩み始めた。何回かの転職の後結婚し、現在、元の会社に戻って、共働きで一子をもうけ、生活を営んでいる。三女は、わが家で犬（チワワ犬）を飼い始めたことが契機となって²⁵⁾、獣医師を志し、それ以来猛勉強して獣医学科に入学し、念願の獣医師となった。大学で知り合った彼氏と大学卒業後結婚し、獣医師としての修業を経て、彼氏の実家近くのさいたま市浦和区に動物病院を開業し²⁶⁾て、現在に至っている。

おわりに

現在までの71年に亘る小生の生きざまを振り返ってみると、その転機は二度あったと思われる。一度目は、大学の教養課程の2年の時に起こった全共闘運動である。二度目の転機は、ダウン症の二女暢子の誕生である。全共闘運動は、それまでに築き上げてきた小生の生き方、価値観を全否定し、新たな生き方を模索する契機となった。その新たな生き方は、未だ見えなかったが、「生産効率第一主義の生き方」「既存の権威・秩序に合う生き方」を否定し、そういう生き方とは違った生き方を模索していくことになった。新たな生き方が判然としないままで、結婚し第一子が生まれ、家庭を設けた。そして、32歳の時に、二女暢子が生まれたのである。彼女の誕生は、その後の小生の生き方に大きな影響を及ぼすことになった。彼女の発達は、ゆっくりであった。立ち上がって歩くのも、言葉を獲得するのも、他の幼児の二倍も三倍も時間がかかった。しかし、日々を精一杯生きて、着実に人間として成長していった。「暢子」という個性を持った存在として、人との関わりのなかで、自らを創りあげていった。暢子は、一人では生きていけない。生きていくには、他者の手助けが必要である。彼女が生きていくために手助けした人は、彼女からその笑顔と感謝の気持ちをもらうことができる。そのように、地域に「共助」のシステムができあがった社会は、障がい者だけでなく、そこに生きる全ての人間が生きやすい社会である。そのような社会、地域に住む人間が互いに支え合い助け合う社会、そういう社会を創りあげていくために小生は力を尽くしたい、そう思うようになった。新たな生き方が明確に見えたわけではない。しかし、人と人

とが、互いに個性ある存在として認め合い、学び合い、人間として共に生きる、そういう生き方、それは、実は昭和時代、東京経済大学時代に生きてきた生き方でもあったのである。今後も試行錯誤しながら、そういう生き方を生きていきたいと今、考えている。

注

- 1) 病院で出産。当時、自宅出産が99%で、病院出産は1%であった。病院出産が50%を超えていくのは、1950年末から始まる高度経済成長以降である。今や、病院出産が99%を占める。小生の叔父(母親の弟)がリヤカーで、陣痛の母親を病院まで運んだとのことである。
- 2) 父親は、1915年生まれ。戦時中、結核に罹患。兵庫の舞子療養所で療養。丙種合格であったが結局兵隊にはとられず、母親は、町内の諸行事に参加した際、陰で非国民と揶揄されたそうである。
- 3) 祖母は、1945年に亡くなっている。祖母の生前から、祖父は同棲している女性がいた。「妾」である。京都弁で「おてか」というが、皆が彼女のことを「おてかさん」というので、小生は、彼女の名前が「おてか」だと思っていた。今出川の敷地内に別宅を、また、鳴滝にも別宅があって、そこで、住んでいた。父親は一人っ子で、祖父は、先代新次郎の時の番頭で、その頭の切れを買われて、一人娘の婿養子に入ったのである。父親は、母親っ子で、耳が先天的に遠く、本人は建築設計士になることを望んでいたが、一人っ子のため、西陣織の織り元を継ぐことになった。織り元には向いていなかったのである。そのことが、後の父親の「荒れ」の要因になる。祖母は、1945年、胃がんで亡くなっている。
- 4) 兄の上に、1942年生まれの長女がいた。恭子という。母親や叔父の話では、よくできた女の子で、般若心経を誦んじたということである。叔父に「この戦争は負けるえ」と言っていて、叔父の怒りを買ったそうである。京都は、大都市のなかで、比較的空襲を受けなかった都市であるが(ただし、アメリカ軍による原爆投下候補地であった)、戦局の悪化を心配した母親は、福井の無医村に恭子と兄を連れて、疎開を決意した。ところが、疎開地で、恭子がイチジクを食べ、疫病を罹患。湖西線で病気の恭子を毛布でくるんで京都に帰る途中、空襲に遭い、汽車は停電、途中停車、真っ暗のなかで、母親の膝の上で、45年7月30日永眠した。その知らせを聞いた母親の実家(やはり西陣の織り元)の親族は、兄(体が弱く、すぐ泣くので、「B29(アメリカ軍の戦闘爆撃機)」と渾名をつけられていた)が死んだと思ったとのことであった。「あの子が生きていれば、今頃は」というのが、母親の口癖になった。母親によれば、恭子が死んだとき、それほど悲しくはなかったという。「どうせ、自分も遅かれ早かれ死ぬのだから」という思いがあった。それが、8月15日の玉音放送を聞いて、「急に悲しくなった。今度生まれてくる子どもは(当時、妊娠していた)、絶対女の子を産もう」と決意したそうである。12月に生まれた子は、決意通り、女の子で、名前を「裕子」と書いて「やすこ」と命名した。恭子の生まれ変わりと感じたのである。
- 5) 初代新次郎が、石田家から分家し、中野家を創設した。
- 6) 1951年の幼稚園就園率は10%未満であり、10人に一人しか幼稚園の通っていなかった。ましてや、3年保育などは皆無であったと思われる。
- 7) 翔鸞小学校の6年生の同級生のその後の進路選択については、拙著「都市部伝統産業地域の子どもたちの職業選択と学校」(『青年の社会的自立と教育』所収。橋本紀子・木村元・横畑知

自分史

- 己・松田洋介・小林千枝子・蔵澄裕子・柳井郁子・茂木輝順・小川年史と共著。大月書店、2011年2月）参照。
- 8) 京都の公立高校は、新制高校のいわゆる「高校三原則」（小学区制，男女共学制，総合制）を全国で唯一守っていた。そのため，公立高校からの京大への進学者数は，多い高校で10名弱，いずれの高校からも1~2名は進学するという状況で，公立の進学校はなかったのである。したがって，有名大学への進学希望者が，私立の学校に流れる傾向が顕著であった。そのなかで，洛星中・高が，志望者を増やしていったのである。こうした状況に対して，京都の財界を中心に，「高校三原則」を改める必要が提起され，1983年，嵯川革新府政が倒れ，林田保守知事が誕生し，公立高校の政策は，転換していくことになった。
 - 9) 不合格であった彼は，中2の編入試験に合格し，洛星中学校に編入した。
 - 10) 高校で1クラス増え，4クラスとなった。高校受験で，1クラス分増やしたのである。京都学芸大学付属中学校には，高校がなく，そこから多数編入してきた。
 - 11) 駿台予備校午前部は，AからDの4クラスあり，成績順に各クラス300名で編成されていた。Bクラスまでが東大合格圏とされた。因みに小生は，2学期にBクラスに落ちた。
 - 12) 経済に進むことは，もう小生の視野から消えていたので，文科Ⅲ類の受験も考えたが，「東大に入りたいために難易度がやや易しい文科Ⅲ類に志望を落とした」とみられるのが嫌で，文科Ⅱ類に再挑戦することにした。変な自尊心があった。
 - 13) 今回の骨折での入院生活で，禁煙を強いられている。煙草との縁もこれで切れそうである。
 - 14) 公害が最もひどかった時期で，田島中学校は，日本鋼管の工場近くにあつて，日中でもスモッグで太陽が黄色く見えた。
 - 15) その調査報告書が，『長野県飯山市富倉地区 教育習俗調査報告』（大田堯・中内敏夫・上野浩道・太田光一・田嶋一と共著，第二部第一章第一節を担当）民間教育史料研究会，1977年10月
 - 16) その調査報告書が，『岐阜県中津川市阿木地区 教育習俗調査報告』（大田堯・鈴木俊作・蔭山雅博・笹本雅子・福田誠治・田嶋一・河原亜代・小川勝一と共著，第Ⅰ部第1章第1節，第Ⅲ部第1章を担当）民間教育史料研究会，1978年6月
 - 17) その一部を「村落復興をめざす教育思想の登場とその構造」『講座日本教育史第二巻』所収（石川松太郎・田嶋一・高橋敏・江森一郎・入江宏・宮崎ふみ子・石島康男・森山輝紀・三好信浩・木村力男，第一法規，1984年4月）で発表した。
 - 18) 「京都府北桑田郡の教育・文化運動」（『国民教育』臨時増刊号，1977年1月）
 - 19) 「教育習俗について考えていること」（『研究室紀要』第5号，東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室，1979年6月）
 - 20) 当時のダウン症児に対する考えを象徴している。小児科の医師ですら，そのような認識だったのである。現在暢子は38歳である。
 - 21) 法学部などは，学部卒業生のうち優秀な学生を大学院に進学させず，そのまま助手に採用し，講師，助教授，教授の道を約束するという特権的な位置づけであった。
 - 22) 『自由民権運動と教育』（坂元忠芳・土方苑子・田嶋一・黒崎勲・片桐芳雄と共著，第三章を担当）草土文化，1984年1月
『講座日本教育史第二巻』（石川松太郎・田嶋一・高橋敏・江森一郎・入江宏・宮崎ふみ子・石島康男・森山輝紀・三好信浩・木村力男と共著，第5章を担当）第一法規，1984年4月

『教育勅語を読む』（加藤地三と共著，第Ⅱ部を担当）三修社，1984年10月

『教育の世紀社の総合的研究』（中内敏夫・橋本紀子・田嶋一・舘かおる・鈴木里美・天田邦子と共著，第三章を担当）一光社，1984年10月

- 23) 関東の大学ラグビーは，対抗戦グループとリーグ戦グループに分かれていて，リーグ戦グループは，6部までである。各部に6～8大学が属している。
- 24) 例えば，昭和では週5日の出校が義務づけられていたが，東京経済大学では，最低週3日出校すれば良いことや，教職員組合があつて，その発言権が強いこと。教授会があつて，討論が保障されていることなど。
- 25) 三女が，迷いチワワ犬を拾ってきて，保健所や警察，近隣の動物病院に届けたが飼い主は現れず，わが家で飼おうかと思ひ始めた4日目に，飼い主が現れ引き取っていった。三女が中学校に行っている間に引き取られたのである。学校から帰って，犬がいなくなったことを知った三女は大泣きし，そのことをきっかけとして，チワワ犬を飼うことにしたのである。
- 26) 三女が獣医師を目指すきっかけを作った最初の飼い犬のチワワ犬の名前はチロロであった。動物病院開業当時16歳で，闘病生活を送っていた。そのチロロへの思いを込めて，動物病院の名称を「結城チロロ病院」とした。